



みゆき

小松市立御幸中学校

学校だより

NO. 4

令和2年8月7日

文責：校長 河南光昭

本当に蒸し暑い日が続いていますが、皆さん、体調は大丈夫でしょうか。

今年度は学期早々に休校措置となり、およそ2か月間にわたって、皆さんは自粛生活を強いられました。友達に会えないさみしさやつまらなさ、有り余る時間をコントロールすることの難しさ、学習が思うように進まない苛立ち、好きな部活動が行えない悔しさなど、様々な不安や心配を抱えていたことでしょう。

5月末の分散登校を経て、6月から学校が再開しました。6月1日に久しぶりに登校してきた際の皆さんのほじけるような明るい表情はとても印象的でした。学校は、生徒の皆さんがいてはじめて成り立つんだなと改めて感じました。



【3年生意見発表会】



【7/11 市ソフトテニス交流会】



【7/11 市バレーボール交流会】

部活動では各種大会が中止となる中で、小松市独自の「2020 Komatsu Sports Champion」支援事業が開催され、校内での「部活動ありがとうの会」とも相まって部活動の一つの区切りとなりました。出場した選手の姿からは、勝敗は度外視して、競技を楽しもうとする姿勢と表情がうかがえました。

授業時数を確保し、学習の遅れを取り戻すために、およそ1か月半にわたって7限授業を行ってきました。この間、皆さんは気持ちの上でも、また体力的にも、かなり大変だっただろうと思います。それでもここまで、与えられた課題にしっかりと向き合い、集中力を持続させたまま落ち着いて学習に取り組んでいた姿は大変立派でした。本来なら夏休み期間中が自分を律するという「自律する力」、換言すれば「セルフコントロールの力」をトレーニングする期間なのですが、皆さんはすでに十分、この力を鍛えたり、蓄えたりしたのではないかと思います。

約2週間という短い夏休みですが、息を抜くところはしっかり休んで、リフレッシュして、エネルギー充電をしてください。各教科の課題、部活動等、いろいろな予定があると思いますが、大切なことは、自分自身でこの期間に、自分の取り組むべき次なるテーマ、具体的な目標を明確にすることです。休み明けの成果を期待しています。

今日は、もう二つお話を紹介します。一つは「^{ぐわ}寓話」
についての話を紹介します。寓話とは、^{ひゆ}比喩によって人
間の生活になじみ深い出来事を取り上げながら道徳的な
解釈をつける物語です。登場人物は、動物、自然現象等
が擬人化されています。

日本の寓話の元祖はイソップ物語です。この物語は古
代ギリシアの寓話集で、民衆の生活の中に生きるための
知恵がたくさん詰まっています。作者はアイソポスと
いう今から約2600年前、紀元前600年ぐらいに生きた人
物です。アイソポス(Aesop)の英語読みがイソップで
す。

室町末期に^{せんきようし}宣教師によって伝えられ、伊曾保物語と呼
ばれました。江戸時代にはあまり広まらなかったそうです。明治初期に英語版の^{ほんやく}翻訳として、再
度イソップ物語が紹介された時は、小学校の教科書に用いられる程普及し、その中にアリとセミ(キ
リギリス)の話がありました。



秋が終わり冬になり、アリがエサ干しに
精を出していると、夏の間、歌ばかり歌っ
ていたセミがやってきて、食べ物を恵んで
くれと泣きつきます。するとアリは皮肉た
っぷりに「歌っていたんだってね。結構で
すね。じゃ今度は踊っていたら」と言って
セミを追い返します。

この寓話はインドに由来するそうですが、ギリシアに紹介された時に、ギリギリスがいなかったためセミに変わり、^{ほくおう}北欧に紹介された時には、今度はセミがいないの

でギリギリスになったそうです。日本にはセミもギリギリスも両方いたために、両者が混同されて使われました。

しかし日本に紹介された時には、最後の場面が微妙に変更されました。アリは、^{なま}怠けていたのはいけないことだと^{いさ}諫めた上で、少しの食べ物を与えてやったとなったそうです。欧米の人達にこの話をすると、「バカバカしい。それじゃ何のためにこの寓話を創る必要があるのか」という返事が返ってくるそうです。

しかしムラ社会の日本では、皮肉を言って追い返すという結末では受け入れられないと当時の人は判断したようです。人間の考え方は、あまり自覚がなくても、自然、風土や伝統というものに影響を受けるのは事実です。現在では「追い返し派」の支持も増えているようですが、平均値では、やはり「恵み派」が多いそうです。

このように、正義を守って徹底的に事を運ぶ、甘えは許さないという欧米の人達の考え方と、日本人の多少は大目みでという^{あいまい}曖昧な考え方、どちらが良いということではなく、その違いや違いの背景などをしっかりと理解することが、グローバルで多様な社会で生きるためには大切なことだと思うのです。そこには自然と人間の間関係をどのように捉えるか、厳しい自然と向き合いながら生きる人間の姿、東洋と西洋、宗教観など色々な価値観の要素があります。そして今、その違いを超えて一つのチームになり活動できる力が社会に求められています。

もう一つは、「正義」という言葉に関わってのお話です。最近、「正義」という言葉をめぐって、様々な論議がわきました。その中の一つに脳科学者の中野信子先生が『正義中毒』という言葉を紹介しています。

昨今の芸能人、著名人の事件報道の中でよく聞かれるのが「許せない」という言葉です。「家族を裏切るなんて許せない」「清纯派だと思っていたのに許せない」「あの態度はないんじゃないの」など、対象者への怒りや憎しみの感情がたくさん「許せない」を生み出しています。そしてそれが「自粛警察」なる言葉と行動が噴出してきたり、ネット上での誹謗中傷へとつながったりして、例えばコロナ自粛期間（ステイ・ホーム）中に外に出歩いていた有名人などはネット上で散々な扱いをされて、中には失職するほど大きな影響があった人もいます。また、女子プロレスラーのKさんのような悲劇的な結末を迎えた事例もありました。法律に触れるような行為はしてはいけないことはもちろんですが、法律上はともかく道徳的にみても、もし自分や自分に近い人が何らかの被害を受けたのであれば、憤りや怒りが湧くのは当然でしょう。



しかし、自分や自分の身近な人が直接不利益を受けたわけではなく、当事者と関係があるわけでもないのに、強い怒りや憎しみの感情が湧き、知りもしない相手に非常に攻撃的な言葉を浴びせ、完膚なきまでに叩きのめさずにはいられなくなってしまうというのは、「許せない」が暴走してしまっている状態です。わたしたちは誰も、このような状態にいつも簡単に陥ってしまう性質を持っているそうです。



中野先生いわく、人の脳は、裏切り者や社会のルールから外れた人といった、わかりやすい攻撃対象を見つけ、罰することに快感を覚えるようにできています。他人に「正義の制裁」を加えると、脳の快楽中枢が刺激され、快楽物質であるドーパミンが放出されます。この快楽にはまってしまうと簡単には抜け出せなくなってしまう、罰する対象を常に探し求め、決して人を許せないようになるのです。こうした状態を、中野先生は正義に溺れてしまった中毒状態、いわば「正義中毒」と呼んでいます。この認知構造は、依存症とほとんど同じだからです。これはまた、いじめの加害者の心理構造とも似ています。

この「正義中毒」は、危機的な状況になればなるほど、盛り上がりやすい素地ができます。現在は新型コロナウイルスの蔓延と同時に、世界恐慌というべき様相となってきていますが、「正義中毒」の現象がさらに強く起きてくるのが心配されています。

ある事柄に対して自分の意見を持つことは大変結構なことです。たとえそれが「許せない」という意見であっても…。ですが、意見を持つことと相手を追い詰めることは別の話ですね。自業自得として「追い返す派」の意見を持ってもよいと思いますが、むしろ「罪を憎んで人を憎まず」のような「恵み派」の寛容さも大切な日本人の心ではないでしょうか。

最後にアイソーポスの名言を一つ紹介します。

「ある場所で不満を感じているものは、別の場所へ移っても、まず満足は得られない。」

古代の人物の言葉ですが、人間の本質は、今も昔もあまり変わらないのかも知れません。この言葉を毎日の学校や家庭での生活にうまく繋げて、考え行動できたらと思います。

感染対策に 夏休みはない

これから先も、新しい生活様式を取り入れて新型コロナウイルスと共存（withコロナ）していかななくてはならないと言われていきます。もう二度と休校という事態にしないためにも、生徒の皆さんには、夏休み中に感染症対策を怠らないようにお願いします。

